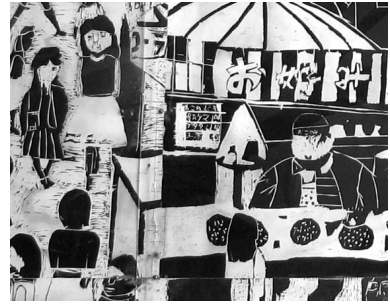


記録された最古の地震 白鳳地震 -

日本書紀の天武天皇 13 年 (684) に大地震 (M 8.3) の記述がある。

「十月十四日、夜十時ごろに大地震があった。国中の男も女も叫び合い、逃げ惑った。山は崩れ河はあふれた。諸国の郡の官舎や百姓の家屋・倉庫、社寺の破壊されたものは数知れず、人畜の被害は多大であった。伊予の道後温泉も埋もれて湯がなくなった。土佐国では田畑五十余万頃 (約 12 km²) が埋まって海となった。



古老は『このような地震はかつてなかったことだ』と言った。

この夕、鼓の鳴るような音が東方で聞こえた。『伊豆島の西と北の二面がひとりでに三百丈ばかり広がり、もうひとつの島になった。鼓の音のように聞こえたのは、神がこの島をお造りになる響きだったのだ』

白鳳地震は被害の状況が具体的に記録された最古のもので、記事の内容から、太平洋海底のプレート境界でのストレスが原因で引き起こされる南海地震と東海地震が同時に発生した大地震と考えられ、近年、和歌山から静岡にかけての各地の発掘調査で、この時の地震の痕跡が発見された。

その痕跡の一つが、明日香の酒船石遺構で発見された。酒船石の置かれている丘から麓に向かって築かれた石垣が「達磨落とし」のように、真ん中の部分が飛び出しながら大きく崩れ落ちており、崩れた石垣を覆う地層の年代などから白鳳地震の時の地変と分かった。

この石垣は斉明天皇の時に築かれたもので、書紀に「水工に溝を掘らせ、香具山の西から石上山 (いそのかみのやま) にまで及んだ」と記されているものである。

その工事を時の人は「たわむれ心の溝工事、むだな人夫を三万余、垣造りのむだ七万余、宮材は腐り、山頂は潰れた」と謗 (そし) った。また「石の山岡を作る、作った端から壊れるだろう」と言ったが、時の人たちが言ったことは、30年後に自然の力によって、その通りになったのである。

末の松山伝説は悲惨な記憶から生まれた - 貞観地震 -

「契 (ちぎり) きな かた身に袖を しぼりつゝ 末の松山 浪越さじとは」

小倉百人一首の清原元輔の歌で、「涙で濡れた着物の袖を絞りながら約束しましょう、末の松山を <大波> でさえも越すことがなかったように、決して心変わりしない」というような意味だろう。

清原元輔は平安時代の歌人で、「枕草紙」の清少納言の父親。この歌に出てくる末の松山は、宮城県多賀城市八幡の宝国寺裏にある、標高10m程度の小さな丘のことと伝えられている。

この土地の人々には昔から一つの言い伝えがあった。東の空が真っ暗になり、天地がひっくり返るような音が聞こえてきたら末の松山目指して逃げよ と。

869年7月9日夜、陸奥国を襲った貞観地震(M8.6)は、地震に伴い発生した大津波が甚大な被害をもたらした。国府の多賀城や多くの民家が損壊した。

「陸奥國地大震動 流光如畫隱映 人民叫呼 伏不能起 或屋仆壓死 或地裂埋
殪 馬牛駭奔 門檣墻壁 頽落顛覆 不知其數 海口哮吼 聲似雷霆 驚濤涌
潮 汧洄漲長 忽至城下 乘船不遑 登山難及 溺死者千許 殆無子遺焉 」

これは正史の「日本三大実録」の地震の記録だが、読み方が分からなくても狂気のように並んでいる漢字で、意味は痛いほど分かる。まるで引き裂かれる天地の中で人も牛馬も山も海も翻弄され、さながら地獄絵のようである。人々は叫び声を挙げて身を伏せ、立つことが出来なかったとある。驚いた牛や馬は奔走し合い、互いに踏みつけあったとある。雷鳴のような海鳴りが聞こえて潮が湧き上がり、川が逆流し、たちまち城下に達したとある。船で逃げたり山に避難したりすることができずに千人ほどが溺れ死に、後にはほとんど何も残らなかった。

ところで、清原元輔はこの地震から百年ほど後の人で、その頃は「末の松山」は愛の契りに触れた歌に多く詠まれ、他にもこんな歌があった。

「君をおきて あだし心をわがもたば す糸の松山 浪もこえなむ」

これは古今集にある歌だが、私が他の人を思う心をもったりしたら、末の松山に波が越えてしまうだろう(波は越えなかったのだから)ということだろう。

地図でみると末の松山のある多賀城市八幡は現在の塩釜港の近く、多賀城跡から海側に近いところにある。潮が湧き上がり城下に達したというのであるから、八幡のあたりは湧き上がった海に飲み込まれて、只その中に、「末の松山」だけが一人健気に残っていたのであろう。

その姿が大災害の中で苦しむ人々に希望を与え、それが伝説として都の人々に伝えられ、やがて時を経て「変わらぬ誓いの証」に姿を変えて、都の歌人に歌われるようになったのであろうか。

奢れるものは久しからず 文治京都地震 -

栄華を誇った平家一門が西海の壇ノ浦に滅んだのは、1185年(元暦2年)の3月のことである。同じ年の8月6日に京都を中心に大きな地震が発生し、東山の法勝寺の九重塔や金堂などが倒壊したのを始め、都の寺院や民家に大きな被害をもたらした多数の死者を出した。またこの時、琵琶湖の水が北に流れて淵が干

上がったと伝えられ、余震が3カ月近くも続いたと記録されている。

鴨長明は「方丈記」の中で、この時の地震をこのように伝えている。

「そのさま、よのつねならず。山はくずれて、河を埋み、海は傾きて、陸地をひたせり。土裂けて水涌き出で、巖割れて、谷にまろびいる。羽根なければ、空をも飛ぶべからず。竜ならばや、雲にも乗らん。恐れの中かに、恐るべかりけるは、ただ地震なりとぞこそ覚え侍りしか」

さらに、地震の直後は、誰もがこの世の空しさなどを話して、心の濁りも薄らぐように思えたが、月日を経ると地震の恐ろしさなど口にしてうわさする人もなくなると、忘れ易い人の心を嘆いている。平家が滅び源氏の世になった時、西海の海に沈んだ人々のことを、口にする人など居なくなってしまったように。



地震によって滅ぼされた戦国の城 - 天正大地震 -

帰雲(かえりくも)城は、奥飛騨の秘境白川郷にあった。この地を領有していた内ヶ嶋氏の居城で、領内は鉱物資源に恵まれ、戦国時代には各地から集まった流浪の侍たちによって金鉱採掘が盛んになり、山間の地ながら活気が溢れていた。

その平和な白川郷に危機が訪れたのは、豊臣秀吉が天下を統一しようとしていた天正年間のことである。三代目城主の内ヶ嶋氏理(うじさと)は秀吉に反旗を翻した佐々成政と同盟していたため、秀吉方の武將に領内に攻め込まれ、帰雲城は敵方に囲まれた。しかし城主の氏理に戦い続ける意思はなく、城と領民を守るため降伏を申し入れ、領民を思う氏理の懸命の嘆願は秀吉の心を動かし、命も領土も安堵されることとなった。

帰雲城に悲劇が訪れたのは、城下が和平の喜びに包まれていたその時である。

天正13年(1586年)1月18日、東海、東山道、越中、飛騨、美濃、近江などを襲った巨大地震は、帰雲山の山崩れを引き起こし、帰雲城は一瞬のうちに城主の内ヶ嶋氏もろとも滅亡してしまったのである。M8以上、死者多数、余震が1年以上続き、三河湾と若狭湾の日本海・太平洋両岸で大津波記録がある。

近江長浜城に居た山内一豊の一人娘「与禰(よね)」が、崩壊した屋敷の下敷きになって死んだのもこの時で、司馬遼太郎の「功名が辻」には、後に土佐の太守になる一豊と千代の夫妻が、只の父親と母親として悲しむ様子が描かれている。

人々を救った「稲むらの火」 - 安政南海地震 -

「大変だ、津波がやってくるに違いない」と、五兵衛は思った。「四百の命が村もろともひとのみにやられてしまう。一刻もぐずぐずしてはいられない」。

五兵衛の住む広村は紀州・湯浅湾の奥にあったが、彼が感じた揺れは、ここ何

日が続いていた地震の揺れと違って、何か不気味なものを感じさせた。津波がやってくると直感した。すぐに大きな松明を持って家を飛び出すと、高台にある自分の田んぼに積み重ねてある稲束(いなむら)に火をつけて回った。

日が没して、天を焦がす稲むらの火に驚いた村人たちが駆け上ってきた時、大音響とともに津波が押し寄せ、村はえぐり取られて跡形もなくなってしまった。人々はこの「稲むらの火」に救われたことに、気付いたのである。

1854年12月24日に発生した安政南海地震(M8.4)は、紀伊、土佐などで津波による大きな被害をもたらし、前日に東海沿岸にかけて津波をもたらした東海地震と合わせて、3万人以上の人々が亡くなった。

この五兵衛の話はこの時の実話を元に、ラスカディオ・ハーンが書いた「稲むらの火」の一節で、五兵衛のモデルは、和歌山湯浅の広村に実在した濱口家七代目当主の濱口儀兵衛である。湯浅の豪商濱口家は、後にヤマサ醤油で有名になるが、この時地震に遭遇した儀兵衛は、自ら米二百俵を供出し、仮説住宅を建設し、被災者に働く機会を与え、さらに将来の防災に備え大規模な堤防建設計画を立案して、藩の許可を得て工事を行った。

地震は大阪湾にも津波をもたらし、地震から2時間後に天保山付近では2m近い高さになった。さらに土佐堀、江戸堀、長堀、道頓堀などの川を遡った津波は、河口の大舟を打ち壊し、橋を流し、人々もろとも全ての川船を飲み込んでいった。

この時、幕府との交渉のため、伊豆の下田港にいたロシア船のディアナ号も大きな被害を受けた。同乗していたロシアの仕官の記録が残されている。

「9時45分、船は約1分間ひどい揺れを感じた。(中略)10時、大波が湾内へうねりながらやってきた。海岸の水位は急速に高まり、下田の町を沈めてしまった。艦からはまるで町が沈下していくように見えた。(中略)二度目の波が湾内へうねりこんだ。今度の波は全てのボートを岸に運び去った。そしてその波が引く時には、下田の町を形作っていたすべての家屋が湾内に洗い落とされていた」

あとがき この文は「地震の日本史(寒川旭著・中公新書)」と、インターネットの記事を参照して書きました。同書を読むと「よくまあこれほど続くなあ」と思うほど次から次へと地震があります。平安期の貞観時代など、30年ほどの間に巨大地震が頻発し、富士山が噴火し、阿蘇山が噴火し、鳥海山も浅間山も噴火してさながら日本列島沈没の様相ですが、それでも貴族は歌を詠み、人々は只生きるために働いて、歴史は流れていったのでしょうか。

カットは今回のコースの門戸厄神で見つけた貼り絵で、「西宮市立甲東小学校」の卒業生が奉納したものだそうです。もちろん本文とは何の関係もありません。本堂の横にあります。実物はなかなか立派なものです。是非見て下さい。

